

2025年夏の甲子園。連日の猛暑が続くアルプススタンドで、ひととき可愛らしく輝いていたのは高校二年生のチアリーダー・真凜だった。

浅黒く日焼けした柔らかい肌に、肩まで届く少し内巻きの黒髪。笑うとえくぼが覗く、優しい雰囲気的美少女。白と青のチアユニフォームは汗でびしょりと濡れ、Fカップ近い巨乳の丸みがくっきり浮き出て生地が肌にぴったりと張り付いていた。胸の谷間から脇の下にかけて汗の染みが広がり、布地が半透明に透け、ブラのレースまでかすかに見えていた。動くたびにユニフォームがぬるぬると肌に擦れ、汗の感触が残る。

応援で両手を高く掲げるたび、脇の下がカメラに抜かれる。

そこには剃り残しの短い黒い毛が数本、汗に濡れて光り、肌に張り付いていた。

中継で何度もアップになったその瞬間、ネットは大騒ぎになった。

「甲子園の可愛い日焼けチアの脇が最高」「汗で張り付いたユニフォームと剃り残しがリアルすぎ」「あの柔らかそうな脇の匂い、絶対甘い」

真凜は大会後にそれを知って、部室で一人顔を覆った。

「えっ.....そんなところまで映っちゃったの？ 黒いポツポツもあるし、汗だくで恥

ずかしいよ……」

甲子園のアルプススタンドで、真凜のすぐ隣に座っていたのが、同じ学校の吹奏楽部一年生・翔だった。

小柄で色白、大きな瞳が印象的な優しそうな少年。トランペットを担当し、応援の合間に真凜のチアパフォーマンスを間近で見っていた。

翔には誰にも言えない秘密があった――極端な脇フェチ。特に残暑の汗ばんだ女の子の脇の匂いに、理性が溶けてしまうほど興奮する。

甲子園の中継で真凜の脇が全国に映った瞬間、翔はスタンドの席で息を止めた。テレビ越しではなく、生で見たあの脇――汗で光る浅黒い肌、剃り残しの短い毛、そしてほのかに漂ってきた甘酸っぱい匂い。

試合中、風が吹くたびに真凜の汗の香りが翔の席まで届き、彼はトランペットを握った手が震えるほど興奮していた。

それ以来、翔は真凜のことを思うだけで胸が苦しくなり、夜ごと甲子園の記憶を反芻してはため息をついていた。学校に戻ってからも、吹奏楽部の練習で真凜のチア部とグラウンドが隣り合っているため、視線を脇に奪われ、すぐに俯いてしまう日々が続いた。

9月に入っても暑さは衰えず、放課後のグラウンドはまだ真夏の続きだった。最高気温は35度を超え、湿気も高く、空気が重い。

ある日、古い用具倉庫の中で、真凜は一人でチアの道具を片付けていた。

白と青のチアユニフォームは今日も汗で重く、肌にぴったりと張り付いている。巨乳の形がはっきりと浮き、脇の下から胸の谷間にかけて汗の染みが広がっていた。浅黒い肌全体がうっすらと濡れて光り、ユニフォームの生地が体に吸い付くように密着し、動くたびにぬるぬるとした感触が残っていた。脇の下は特に汗が溜まり、剃り残しの毛が濡れて張り付いている。

そこに、翔が小さな声で入ってきた。

「あの.....真凜先輩、甲子園の応援、すごく可愛かったです.....スタンドで隣にいて、ずっと見てました」

真凜は汗を拭きながら振り返って、にこりと微笑んだ。額に汗の粒が光っている。

「ありがとう。吹奏楽のトランペット、かっこよかったよ。でも、変なところで話題になっちゃって、恥ずかしいんだよね.....」

翔は俯きながら、震える声で言った。

「僕.....実は、先輩の脇がすごく好きで.....甲子園で生で見たとき、汗の匂いが少し届いてきて.....あの、剃り残しも、汗で濡れてるのも、全部.....ずっと考えてて.....」

真凜は少し驚いたけど、翔の真剣で恥ずかしそうな顔を見て、拒めなかった。甲子園で隣にいた後輩が、自分をこんなに見てくれていたことに、胸が少しきゅんとした。

「.....ここ、誰も来ないし。ちょっとだけなら、いいよ。でも、変なことしたらダメだからね？」

倉庫の奥、蒸し暑い空気の中で、真凜は恥ずかしそうに両腕をゆっくりと上げた。

汗で張り付いたユニフォームの袖がまくれ上がり、浅黒い脇の下が完全に露わになる。